

1月のコラム ～ 34歳の女性首相に驚かない国って素敵！～

新しい年を迎えました。この冬は暖かく、穏やかな年末年始を過ごされたことと思います。本年もどうぞよろしくお願い致します。

フィンランドで、最年少34歳の女性首相誕生が誕生しました。一瞬「大丈夫？」と驚きましたが、ほぼ同時にそれは杞憂に過ぎないとわかりました。彼女ならできるだろうと思えるような優秀で魅力的で頼もしい30歳代の女性が周囲にもたくさんいるという事実に気づいたからです。これは、ただ「社会の認識」だけの問題なのだと思います。

フィンランドで発足したこの新内閣は、女性12人・男性7人、平均年齢47歳。日本の安倍内閣は、人数は同じ19人で、女性3人・男性16人、平均年齢は61歳です。世界経済フォーラムによる「ジェンダー・ギャップ指数2018」では、フィンランドは4位、日本の順位は、149か国中110位です。

フィンランドでは「若さ・女性」という点は、注目されることではないようです。まさに「年齢や性別に関係なく、スキルや才能が重視されて、その立場にふさわしい人が着任でき力を発揮できる社会である」という価値観が国民に備わっているということでしょう。

彼女は、貧しい家庭に育ち「この国の福祉と教育制度がなければ、ここまでくることは不可能だった」と語っておられるそうです。政治家を志したのも自分の人生からこの国の良さを守りたい、良くしたいという思いからなのだろうと想像できます。若干27歳で市議会議長に就任したという経歴も頼もしい限り。

日本から見ると「女性を積極的に登用している」と思えますが、男女半々にするといった平等のレベルでないようです。「平等に機会が与えられ、機会均等のもと成長できる能力ある者が出世していく。今回の結果は、年齢性別に関わりなく、実力・才能ある人たちが、たまたま彼女たちだったというだけの話」だそうです。

出生数は毎年減り続け、日本の人口はどんどん減っていますが、現在のところ日本の少子化対策は実を結んでいません。子どもの貧困と経済格差の連鎖も気にかかる。海洋汚染や地球温暖化も心配。人が尊厳を保ち、幸せに生きていくための教育や介護に携わる分野への支援があまりにも進まない。都会に空き家が増えているのに郊外の開発は続けられる。若い指導者が出さえすれば解決するとは思いますが、しがらみ、忖度、既得権…そんなものに縛られず、自由に手腕を振るうことができる世界ならどんなにか未来が明るい気がします。

もとより政治も会社経営も1人でするものではありません。それぞれの分野での専門知識と必要な経験を持つプレーンがいればよいだけの話。リーダーであるために年齢も性別もなく、この人についていきたい、一緒に未来を作りたいと思わせる人物でありさえすればいい。組織で人を生かすというのも、年齢、性別、慣習、過去の成功体験といった枠組みを超えたところにあるように思います。